

『就実論叢』第46号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2017年2月28日 発行

日本語における語の認定と品詞分類をめぐって —日本語教師のための日本語文法をもとめて—

On Word Recognition and Part of Speech Classification in Japanese

中 崎 崇
城 田 俊

日本語における語の認定と品詞分類をめぐる

—日本語教師のための日本語文法をもとめて—

On Word Recognition and Part of Speech Classification in Japanese

中 崎 崇 (表現文化学科)

NAKAZAKI Takashi

城 田 俊 (獨協大学)

SHIROTA Shun

0. はじめに

日本語教育を行うためには、非日本語母語話者にも日本語母語話者にもわかりやすい文法を新しく組み上げる必要がある。本稿の目的はその第一歩として、語という単位をいかに認定するか、語にはどのような種類があるのかをまず検討するものである。以下に記すことは、もちろん試論にすぎない。まず1. で語の認定に関わる問題を検討し、2. で本稿の語の認定と品詞分類に関わる「膠着」「屈折」といった現象を概観し、3. 以降、文法記述に対する本稿の立場を述べ、試論的に語の認定と品詞分類を行う。

1. 語の認定の問題

我々は、文の中に、それより小さな単位である語という単位が存在することを知っている。「はる(春)」「はつはる(初春)」「はるめく(春めく)」「はるめいた(春めいた)」「はるめいて(春めいて)」などが語の例である。

「語」は心理的直感にもとづく記憶の単位である。これらの語は、また、形態素に分割できることを知っている。形態素とは、英語なら英語の中で、日本語なら日本語の中で、繰り返し現れる、意味を持つ最小の単位である。「はつはる」の「はつ」は「新しい」という意味を持つ形態素である。それは名詞の前につけて用いられる。「はるめく」は、haru・mek-uと表記でき、haruとmek-と-uの3つの形態素に分解される。haruは「春」という意味を示す語彙形態素である。mek-は、語彙形態素に後接して、「そう見える、そういう感じがはっきりする」という意味を示しつつ、子音語幹動詞を形成する接辞形態素である。-uは子音語幹動詞に後接して「非過去形」を形成する語尾形態素である。

「はるめいた」は、haru・mei-taと仮に表記され得、haruとmei-と-taの3つの形態素に分解される。このうちmei-は、mek-という動詞語幹形態素が-(i)taという語尾形態素の接合を受けて、変容をおこしたかたちである。このような変容には、イ音便の名が与えられている。-(i)taは動詞の過去形をつくる語尾形態素である。

以上記した程度の「語」に関しては、問題はないか、少ない。しかし、「春に（咲く）」、「春が（来た）」というような、アクセントによって統一され、通常ひと続きによって発音される下線を付して示した単位（学校文法では文節と呼ばれる）は、一語であるのか、それとも「春」という語（自立語）に「に」とか「が」という語（付属語）がついたもの、つまり、自立語（春）＋付属語（に／が）という二語に分解できるのかということは、難しい問題である。

語が記憶の単位であり、心理的直感にもとづくというなら、「春」も語、「が」「に」も語であるという答えも出し得る。「が」「に」はあらゆる名詞の後に出現しえ、名詞の末尾を変容させることもなく、また、自分自身で変容することもないので、名詞と「が」「に」の間に切れ目がはっきりと認められる。現に「春」という語があり、そのような題を持つ詩もあり、その「春」に「が／に」がついて、文中で用いられ、その「が／に」は「春」からとりはずすことができ、「冬」「秋」にも後接できるのである。「が」「に」は文法的単位であり、なおかつ語であるといってもさしつかえないようにも思える。現に学校文法のように、このような「が」「に」を語として認定する文法学説もある。¹学校文法によると「春」は自立語（名詞）、「が」「に」は付属語（格助詞）とされ、「春が」「春に」は二語であると分析される。日本語教育や日本語学においても、このような分析がなされることもある。

一方、「春めいた」「春めて」「来た」が一語なら、そのパラレルで、「春が」「春に」が一語であるとも考えることも出来る。事実、鈴木（1972）や高橋（2005）では「春が」「春に」は「春」という名詞が語形変化（曲用）した語形であり、一語であると説かれる。

2. 膠着と屈折

ここでは、後に述べる本稿の立場からみた語の認定や品詞分類に関わる「膠着」「屈折」といった現象をみておく。

日本語では文法的関係が、名詞では膠着的に表現され、動詞では屈折的に表現される。膠着の膠とは「ニカワ」のことであり、主に魚の骨・皮からつくられた昔の接着剤だ。これでものがはりつけられると、はりつけられたものの境目がはっきりと見え、水をつけてはがすこともできなくはない。接着の境目が見えず、取り外しができない溶接とは大きく異なる。日本語では、名詞に後接する助詞（文法形態素）は、接合に当り、先に述べた通り、基本的に外容をかえない。その上、たとえば、ガ、ヲ、ニはどのような名詞につこうがガ格、ヲ格、ニ格それぞれの意味を保存し、いかなる名詞についてもその外容はそのままガ、ヲ、ニである。つまり、一定の意味・内容をもつ助詞（文法形態素）の外容は1つであり、変化することがない。この点において、ラテン語等の屈折的形態を持つ名詞と著しくことなる。²

では、屈折とはどのようなものであろうか。名詞にA類・B類・C類・・・というような類別がある（後に示すラテン語であれば第1変化、第2変化、第3変化…がこれにあたる）。他方、ある一定の格、例えば、与格の外容は、それぞれの類別に応じてa・b・c・・・と

多様である（ラテン語であれば第1変化の与格、第2変化の与格、第3変化の与格となる）。つまり同義でありながら異なる外容を持つ格語尾形態素が複数存在するということである。そのうち、aは、名詞A類に関しては例えば与格であるが、B・C類では属格である。bはB類に関しては与格だが、A・C類では例えば主格となり、異なるということがおこる。³例えば、ロシア語の男性名詞（stakan コップ）の生格は -a で示されるが、女性名詞（komnata 部屋）では -a は主格を示すといったようにである。

いずれにしても、語幹は自己の類別（A・B・C・・・）に従い、格語尾形態素（a・b・c・・・）を一定の格的內容において選択していく。一方、格語尾形態素（a・b・c・・・）は自分をそれとして使ってくれる語幹を選択してのみ結びつく。このようにして、語幹と語尾の間には相互予定関係が成立し、語幹と語尾の境目は専門家でないただちに見分けられなくなる。両者は一体化して、切れ目が見えなくなってくる。よって、格形態では名詞が語形を変化させたかたちのように見えてくる。これが屈折である。具体例を示そう。ラテン語の名詞（単数）の変化を表示すると、表1ようになる。表1は、ラテン語の名詞 puella 「少女」、dominus 「主人」、avis 「鳥」の格の形態（単数）を示したものである。

表1

格 \ 類	第1変化	第2変化	第3変化
主格	puella	dominus	avis
呼格	puella	domine	avis
属格	puellae	domini	avis
与格	puellae	domino	avi
対格	puellam	dominum	avem
奪格	puella	domino	ave

この場合、第1変化、第2変化、第3変化というのが名詞の類別にあたる。語幹と語尾の相互予定関係はこの3例だけでもはっきりと見てとれよう（第1変化には与格語尾形態素 ae が、第2変化には o が予定的に選択される）。しかし、2例以上掲げないと、同義で異なる外容を持つ格語尾形態素の存在が明かとならないため、屈折という事態は見えてこないことも注意されたい。英語の he, his, him のような変化を屈折の例として掲げる解説書もあるが、この一例では屈折の本質は理解できない。日本語の名詞には、変化類型という意味では語の類別は存在しない。繰返しになるが、どのような名詞にもガ格はガが、ヲ格はヲが、ニ格はニが選択されるのである。

一方、日本語の動詞では、1つの文法的意味を持つ形態素が複数あり、それが、動詞の語幹を選択するという屈折の現象があきらかにみとめられる。最も良い例が命令形をつくる語尾形態素である。命令形をつくる語尾形態素は、-e と -ro の2つがある。これらは -e であれば子音語幹動詞を選択し、-ro であれば母音語幹動詞を選択する（語幹の方から言えば、子

音語幹は、命令の意味において、-e を選択し、母音語幹は、-ro を選択する)。-e が選択された書ケ kak-e であっても、-ro が選択されたタベロ tabe-ro であっても、命令といった内容は全く同じである。しかし、外容ははっきりとことなる。-e は子音語幹を選択してはじめて、-ro は母音語幹を選択してはじめて、命令形となるのである。このようにみると、日本語の動詞の語幹は子音語幹類と母音語幹類の2類に分かれており、語尾もそれに応じ、子音語幹用のものと、母音語幹用のものの2類があることがわかる。語幹を拡大して、文法上の語幹（使役語幹 -sase と -ase、受身語幹 -rare と -are 等）を形成する形態素においてもそれは同様である。例を表示しよう。

表2 動詞の語尾・語幹形態素

		形態		子音語幹用形態素	母音語幹用形態素
語尾形	完結形	伝達形	非過去形（辞書形・ル形）	-u	-ru
			過去形（タ形）	-ita	-ta
		呼び掛け形	意志・勧誘形（ヨウ形）	-oo	-yoo
			命令形（ロ形）	-e	-ro
	接続形	中止形（テ形）		-ite	-te
		前提形（タラ形）		-itara	-tara
		条件形（レバ形）		-eba	-reba
		逆接形（タッテ形）		-itatte	-tatte
		例示形（タリ形）		-itari	-tari
			「連用形」[汎用形]		-i φ
語幹形	態形	使役態形		・ ase(-ru)	・ sase(-ru)
		受け身態形		・ are(-ru)	・ rare(-ru)
		可能・自発態形		・ e(-ru)	・ [ra]re(-ru)
		否定形		・ ana(-i)	・ na(-i)

ここで注意すべき点がある。それは「屈折」と「融合」との区別である。形態素が他の形態素と接合するに当たり、相互の接合面を（主にその音声上の相互関係から）変容させ、接合面の切れ目を見えにくくする事態がある。いわゆる五段動詞にみられる「音便」はその例である。このような現象が、「融合フュージョン fusion（ラテン語 fusio）」と呼ばれる。「融合」は「屈折」に伴って出現することがある。「書ケ」kak-e「飛べ」tob-eのような、命令形の形成は上述のような「屈折」であるとしても、なんらの「融合」はおこっていない。「書ク」kak-u「飛ブ」tob-u といった伝達形の場合も命令形と同様である。

それに対し、「書ク」kaku が過去形になると kai-ta、「飛ブ」tobu が ton-da になる時、「屈折」に「融合」が伴われている。-ita の接合を受けて、kak- の語幹末子音 k- は i- に変容し、-ita の i は消失するからである（ki が i に変容するという記述の方法もあり得る）。また、tob- の語幹末子音 b- は n に変容し、-ita の i は消失し、かつ、-ta は（b- の有声性を引きついで）-da に変容しているから、ここにも「屈折」に伴って「融合」がおこっている。

以上のように「屈折」には「融合」が伴われることがあるが、語幹と語尾の相互予定関係である（いわば呼応といった文法的な現象である）「屈折」と接合面の変容である（単なる

音声的な現象である)「融合」については、少なくとも日本語研究において、両者は原則的に区別しておくべきだろう。⁴

繰返すが、「融合」がおこると形態素間の境目が見えにくくなったり、消失したりする。「屈折」がおこっても形態素間の境目が見えにくくなる。それに対し、「膠着」では形態素間の境目の不明確化、ないし、消失はおこらない。この意味で「屈折」と「融合」は「膠着」の対極的存在である。しかし、そうだからと言って両者を混同していいというものではない。

3. 3つの立場

「春が来た」という文は何語からできているか、という問には以下の(1)～(3)で示されるような3つの答えがあり得る。

- (1)「春／が／来／た」という4語
- (2)「春が／来た」という2語
- (3)「春／が／来た」という3語

(1)は「春」「が」「来」「た」の4の語から構成されていると考える立場である。具体的には「春(名詞―自立語) + が(格助詞―付属語) + 来(来ルという動詞―自立語の「連用形」 + た(「連用形」に接続する助動詞―付属語)」となる。(1)は学校文法で採られる立場である。この立場は、名詞のありよう、つまり、膠着的ありよう、を動詞のありようである屈折的ありようにまで及ぼした見方に立つ。名詞のありようから動詞のありようを見る見方といってもよいかもしれない。屈折的形態を膠着的に見ようとするため、伝統的意味での「活用」の概念(語幹と語尾の相互予定関係ではなく、種々の後続の要素に続くための語幹の変化を「活用」とする考え方)が必要となる。

(2)は「春が」「来た」の2語から構成されていると考える立場である。具体的には「春が(名詞「春」がガ格形に立つ一語と考える) + 来た(動詞「来る」の過去形であり、一語と考える)」となる。(2)は鈴木(1972)や高橋(2005)で採られる立場である。この立場は、動詞のありよう、つまり、屈折的ありようを名詞のありよう、つまり膠着的ありようにまで、及ぼした見方といえよう。屈折形態で膠着形態を割り切ろうとする立場である。理論的にはすっきりするが、名詞と「が」などの格助詞との間に切れ目がはっきりと認められることから「春が」を1語のかたちであると言い切るのにちゅうちょをおぼえるといった日本語母語話者の言語直感に一部で衝突する。

(3)は「春」「が」「来た」の3語から構成されていると考える立場である。具体的には「春(名詞) + ガ(格助詞) + 来た(「来る」という動詞の過去形であり、一語)」となる。この立場は、名詞は形態形成に当り、膠着的形態をとることを明確に認める立場である。動詞については、その語形を一語として認めつつ、名詞については、名詞を文法的に生かすことの

できる助詞（格助詞）は付属語であるとしても、接合面での変容がありえず、形態素間の境目がより明確であることから、ある程度独立性を持った要素であると考えられる立場である。これは日本語母語話者の名詞を語と認める認識を率直に認める立場に立つ。この立場は、名詞＋格助詞は文中における名詞のあり方（存在形態）であることを認める。しかし、名詞＋格助詞は名詞と格助詞の2つに明確にわかたれ、1語のかたちであると言い切るのにちゅうちょをおぼえる。そういった日本語母語話者の言語直感に配慮した立場といえよう。理論的には整合性がないと評されようが、日本語文法の本然に対応し、そこからくる日本人の心理的直感を受けとめる立場とっていいかもしれない。さきばしっていえば、日本語は名詞（体言）では膠着的手段を用いて語のかたちをつくり、動詞（用言）では主に屈折的手段を用いて語の形態をつくるということになる。日本語は膠着、屈折のいわば二刀流で文法形態をつくる言語である。日本語は膠着語でもない。屈折語でもない。日本語は膠着・屈折語である。

日本語教育においては、通常「が」「を」「に」「と」といった格助詞は、名詞の語形変化として扱ったり、格助詞として体系的に取り扱ったりすることはあまりない。「が」「を」のように動詞と組み合わせて文型の中で扱ったり、「に」「と」のように「受け手」「あいて」などの意味を中心にして個別に扱ったりすることが多い。ただ日本語教育の教師用指導書などでは「が」「を」「に」「と」などが、やはり助詞（格助詞）として記載され、助詞は付属的要素であることを認識しつつも一品詞の扱いを受けることが多い。これは学校文法で同じく語として扱われる「らしい」「たい」といった助動詞が、日本語教育では伝聞・推量表現、希望表現として文型や動詞の変化語尾として扱われるのとは対照的である。格助詞は助詞の一類である。品詞とは語の分類であり、決して形態素の分類ではない。格助詞を一語と実は扱っているのである。この点からも、第3の立場は日本語教育の現場にいる人たちからも支持されるのではないだろうか。

ただし、名詞は、もの・ごとの名として（例えば、「本屋」）何もとらず存在するとしても、格助詞（ゼロを含む）をとってはじめて文中で働く事実にも目を向けておかなければならない。名詞＋ガ／ヲ（格助詞）は名詞の文中でのあり方、つまり、存在形態である。このまともを名詞の形態としてとらえる把握の仕方でも文法を考える上で大切である。記憶の単位として、また、感覚的判断では2語であるとしても、文法を学理的に組み立てる上で、この2語とみとめられるかたまりは自立語名詞のフォーム（あり方）としてとらえられるという、複眼的見方を持つ方が教育の現場にも則し、より生産的と思われる。

以降、本稿は3つめの立場に立ち、教育文法としての語の分析を試みていく。

4. 自立語と付属要素

日本語には、動詞や名詞のように実質的意味を持つ語と、そういった語に付属したり、また、語より大きな単位である文に付属したりして、それを文法的に働かせたり、文法上の意

味を付け加えたりする付属的要素がある。前者を自立語と呼び、後者をそのまま付属要素と呼ぶ。

5. 品詞

品詞とは、保有する意味や文法上の性質に基づく語の分類である。自立語と付属要素に分けて、本稿の立場からみた品詞論を論じていく。

5.1. 自立語

自立語は、次の表3のような品詞に分けられる。

表3

品詞名	例
動 詞	書く・タベル
イ形容詞	寒イ・赤イ
ナ形容詞	静カナ・キレイナ
名 詞	本・私
副 詞	ゴク・特ニ
連 体 詞	コノ・ソノ・小サナ・大キナ
接 続 詞	マタ・ソシテ
感 動 詞	アア・ハイ

まず、動詞と形容詞であるが、動詞は「書く」といった動きだけでなく、「死ぬ」「割れる」といった状態・性状変化を含めて動作・変化・存在を表現し、形容詞は「コンクリートは固い」といった性質・「今部屋は暖かい」といった状態を表す。⁵かたちの上では、動詞は「書く kak-u」「タベル tabe-ru」など叙述形の非過去形（辞書形）でuとなり、イ形容詞は連体形の非過去形でイ、ナ形容詞はナで終るといった特徴を持つ。⁶⁷

名詞は、語彙的には、ものごとの名を表したり、それをさし示したりする意味内容を持ち、文法的には、連体修飾を受けることができ、格助詞ヲをとっていわゆる目的語（補語）となり、ガをとっていわゆる主語となり得るといった特徴を有する品詞である。

副詞は、動詞、形容詞、副詞を修飾するといった構文上の機能に限定されている品詞である。「特ニ優れる」といった副詞の機能と「大キク（イ形容詞の副詞形）飛ぶ」「静かにに（ナ形容詞の副詞形）起キル」のような形容詞の副詞形のそれとは同じである。⁸

連体詞は、名詞を修飾するといった構文上の機能に限定されている品詞である。「小サナ机」といった連体詞の機能と「小サイ（形容詞の連体形の非過去形）机」といった形容詞の連体形の非過去形の機能は同じである。

接続詞は、「委員長または副委員長が出席する」のように語を接続したり、「雨が降ってき

た。また風も降ってきた」のように文を接続したりする。マタ、ソウシテの類がこれである。

感動詞は、構文上は他の文の部分と結びつかず、「アア」のような感動や「ハイ」「イイエ」といった応答・「オイ」のような呼び掛けを表わす品詞である。感嘆詞、間投詞とも呼ばれる。

上記の分類によってどの語も明確に分かたれるわけではない。例えば、時を表わす名詞は副詞のように用いられることがある。「夕方ガ好キダ」といった場合、夕方は名詞であるが、「夕方出発シタ」といった場合、夕方は副詞として用いられている。夕方は、名詞としてはガ格以外に「夕方ノ天気」「夕方ニ晴れる」「夕方ヲ避ける」のように様々な格に立つことができるうえに、そのままのかたちで副詞としても用いられる。このような場合、前者を名詞、後者を副詞として2語と考えておいた方が、理論的にはすっきりする。このようなことは、名詞とナ形容詞にもおこる。「安全ガ大切ダ」といった場合、「安全」は名詞であるが、「安全ナ方法」「安全ニ作業ヲ進メル」といった場合、「安全ナ」「安全ニ」はナ形容詞である（「安全ニ」はその副詞形）。

自立語のうち、動詞、形容詞には語尾変化があるが、名詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞には語尾変化がない（名詞の形態は格助詞がついたかたちで、語尾変化ではない）。語尾変化は、助詞助動詞を膠着的形態と認めて先行する語との形の上でのギャップを埋めるために考案された説明手段である国文法でいうところの「活用」とは全く異なる。

5.2. 付属要素

付属要素は、屈折的に出現する要素（屈折要素）と膠着的に出現する要素（膠着要素）とがある。屈折要素は主に動詞に関連して出現する。⁹

5.2.1. 屈折要素

5.2.1.1. 語尾助辞

動詞は、語尾の変化によって、表4のようにテンス（時制）、ムード（法）といった文法的意味を表すかたちをつくり出す。

表4

テンス	非過去	貸ス	kas	-u
		タベル	tabe	-ru
	過去	貸シタ	kas	-ita
		タベタ	tabe	-ta
ムード	命令	貸セ	kas	-e
		タベロ	tabe	-ro
	意志	貸ソウ	kas	-oo
		タベヨウ	tabe	-yoo

このかたちをつくるのが語尾助辞 (-u/-ru、-ita/-ta、-e/-ro、-oo/-yoo) である。表4の非過去、過去、命令、意志といった意味には、上述の/で記したように、それぞれ語尾助辞が2類あり、あきらかに屈折的に出現しており、屈折要素である。語尾助辞によって形成されるかたちは、これ以上屈折的語尾変化をしない。

5.2.1.2. 語幹助辞

さらに動詞は、表5のように語幹を拡大することによりヴォイスの形態をつくりだす。

表5

ヴォイス	受身	能動	書ク	kak		-u
			タベル	tabe		-ru
		受動	書カレル	kak	・are	-ru
			タベラエル	tabe	・rare	-ru
	使役	非使役	書ク	kak		-u
			タベル	tabe		-ru
		使役	書カセル	kak	・ase	-ru
			タバサセル	tabe	・sase	-ru
	可能	非可能	書ク	kak		-u
			タベル	tabe		-ru
		可能	書ケル	kak	・e	-ru
			タベ [ラ] レル	tabe	・[ra]re	-ru

書カセル/タバサセル、書カレル/タベラレル、書ケル/タベレルなどはヴォイスの形態である。この形態をつくるのは・are-ru/・rare-ru、・ase-ru/・sase-ru、・e-ru/・[ra]re-ruと表記できる語幹助辞である。表5の受動、使役、可能といった意味には、上述の例を/で記したように、それぞれ語幹助辞が2類あり、あきらかに屈折的に出現し、屈折要素である。すでに使っているが、屈折要素には助辞の名を与え、語尾をつくるものは語尾助辞、語幹を拡大するものは語幹助辞という用語を用いることにする。語幹助辞によってつくられる tabe・rare のようなかたちを語幹形と仮称するが、この語幹形は -ru のような語尾助辞によって後接され、屈折的語尾変化を行う。¹⁰

5.2.2. 膠着要素

5.2.2.1. 助詞

その他の付属要素として助詞がある。格助詞、とりたて助詞、並列助詞、接続助詞、終助詞などである。

格助詞は、「花子ガ太郎ライジメル」の「ガ」「ヲ」などである。動詞と形容詞は述語とし

て叙述の中心となり、その内容をあきらかにするために名詞を要求する。その名詞がいかなる役割を担って、動詞や形容詞に文中で結びついているかを示すのが、この「ガ」「ヲ」などの格助詞である。

とりたて助詞は、文中における実質的品詞に照明をあて、聞き手の注目をひくものである。僕^ハ／モ行ク、書キ^ハ／モスルなどがとりたて助詞の例である。

並列助詞は、2つ以上の物事を並べていうのに用いられる。「筆^ト紙を用意スル」の「ト」、「父^カ母^ガ行ク」「カ」などがその例である。

接続助詞は述語の後に立って文を下の文に接続する。シ、ケド、カラ、ナラなどがその例である。

終助詞は文末に用いられ、「ソウダ^ヨ」「ソウダ^ネ」「ソウダ^{ナア}」のように疑問や詠嘆・感動などを表わす。

以上5種の助詞について例をあげ、短かく説明したが、これらの要素は前接の要素が何であれ、かたちの変化はなく、あきらかに膠着的に出現することから、膠着要素とすることができる。これらの要素には伝統的に助詞の名が与えられている。また、これらの助詞は日本語母語話者には、その膠着性から語と認識され、伝統的に付属語に数えられる。

5.2.2.2. 述語化詞・述末詞

名詞は「コレ^ハ本^ダ」のように「ダ」に後接されると述語となる。「ダ」は名詞を述語のように働かせる力がある。この意味で、ダを「述語化詞」と呼ぶことにする。¹¹

このダは「述語化詞」の名が与えられるとしても名詞を文法的に働かせるだけの力しかなく、実質的意味を持たない。よって、付属的要素であることに変わりはない。「ダ」は、助詞同様、実質的意味を持たず、かつ、名詞等に膠着的に後接するが、助詞とは異なる特徴がある。「ダ」は、文法的意味に従って、自分自身が語尾変化することが出来る。たとえば、過去形では「ダッタ datta」、例示形では「ダツタリ dattari」、連用形（汎用形）では「ダde」、となる。つまり、屈折的ともいっていい語尾変化を自身で行う。¹²

この点、「ダロウ、ヨウダ、カモシレナイ、ソウダ（伝聞）、デス」等、述語の後に立って話し手の推量、伝聞、聞き手に対する丁寧な態度を表す伝統的に「助動詞」の一類として扱われてきたものも同様である。これらは、実質的内容はなく、文法上の意味しか持たず、述語の後に膠着的に出現する。しかし、「ダロウ」「ソウダ」を除き、自身で語尾変化を行う可能性を持つ。例えば、「カモシレナイ kamosirena-i」は過去形で「カモシレナカッタ kamosirena-katta」、「例示形でカモシレナカツタリ kamosirena-kattari」、連用形（汎用形）で「カモシレナク kamosirena-ku」となる。つまり屈折的ともいっていい語形変化を自身で行う点、「述語化詞」と共通する特徴を持つ。これらは、述語の後に膠着的に出現し、文に話し手の気持や態度を入れ込む。この性質をしてこれらをやや熟さぬ用語であるが、「述末詞」と呼ぶことにする。「述末詞」は文法的意味しか持たず、付属語の一類であること言

を待たない。^{13,14}

6. まとめ

これまで文の構成要素たる語についての認定のあり方、その分類について述べてきた。最後にこれまでのまとめと補足を述べておく。

まず、動詞や名詞といった実質的意味を持つ語である自立語と助詞（格助詞・とりたて助詞・並列助詞・終助詞）、述語化詞、述末詞など助詞ないし詞という漢字を用いて名付けた付属要素、さらに語尾助辞・語幹助辞等助辞という用語を用いて名付けた付属要素の関係は、次の表6のようにまとめられる。

表6

自立語…	語尾変化なし	名詞（本・私）
		副詞（ゴク・特ニ）
語尾変化あり	語尾変化あり	連体詞（アノ・コノ）
		接続詞（ソシテ・シカシ）
語尾変化あり	語尾変化あり	感動詞（アラ・ハイ）
		動詞（書ク・タベル）
語尾変化あり	語尾変化あり	形容詞 {
		イ形容詞（寒イ・赤イ）
語尾変化あり	語尾変化あり	ナ形容詞（静カナ・キレイナ）
付属要素	屈折要素	語尾変化なし－語尾助辞（-e/-ro,-oo/-yoo）
		語尾変化あり－語幹助辞（・are-ru/・rare-ru, ・ase-ru/・sase-ru）
付属要素	膠着要素	格助詞（ガ・ヲ）
		とりたて助詞（モ・ハ）
付属要素	語尾変化なし	並列助詞（ト・ヤ）
		接続助詞（シ・ケド）
付属要素	語尾変化あり	終助詞（ネ・ヨ）
		述語化詞（ダ）
付属要素	語尾変化あり	述末詞（ダロウ*・ソウダ*・カモシレナイ・ヨウダ）
		*述末詞　ダロウ、ソウダは語尾変化がない

付属要素において、助詞ないしは詞を用いるものは膠着的に出現し、助辞は屈折的に出現する文法的要素という差を持つに過ぎず、付属的要素という共通性は確固としてある。もし、膠着・屈折という区別を無視し、この共通性に頼るなら、語尾助辞を語尾助詞、語幹助辞を語幹助詞といいかえてさしつかえない。こうすると、共通認識である学校文法の見解に近づき、それと折り合うことができる。ここでなお、語尾助辞、語幹助辞に助辞の名を与え、語

に昇格させることに躊躇するのは、これらの要素が屈折的性質を帯び、つくり出されるものが1語となり、それ自身が1語の部分に見えるという事実にとだわるためである。

本稿で堅持する記述態度は、学校文法（その原型となった橋本進吉の文法論）とさほどの隔たりはない。隔たるのは膠着・屈折の峻別と活用の概念の廃捨と語尾変化の厳密な規定にほかならない。鈴木（1972）や高橋（2005）らの文法論と異なるのは、ひとえに、名詞の形態を名詞+格助詞（付属語）という結合と見て、語形変化と敢えてしない点となろう。

繰返すが、語尾助辞、語幹助辞は付属要素であるが、語とは言えない。語の一部を形成するものに過ぎない。しかし、これら単位を品詞分けのらち外に置くのもとまどいと呼びおこす。らち外におくとしてもどこかで論じる必要がある。このようにして、付属語扱いで、表の中に加えざるを得ない。これは理論的不備を反映するというより、現行の記述手段を用いる限り、必然的に現れる日本文法の本然と思われる。

7. 参考文献

- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリエーネットワーク
庵功雄他（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリエーネットワーク
城田 俊（1982）「体言の体系」『国語国文』第51巻 第12号 京都大学国語国文学会
（1998）『日本語形態論』ひつじ書房
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
高橋太郎（2005）『日本語の文法』ひつじ書房
高見澤孟（2004）『新・はじめての日本語教育1』アスク
仁田義雄（2000）「単語と単語の類別」『文の骨格』岩波書店
橋本進吉（1948）『國語法研究』岩波書店

¹ 現在の学校文法の根幹をなしているといわれる橋本文法では、「が」「に」などは単独で文節を構成できない語（橋本（1948）はこれを第二種の語とよぶ）として、語と認定している。また橋本は「お寺」「私たち」などの「お」「たち」といった要素を「語の如く單獨にあらはれる事なく、常に他の語に附着して、之に或意味を附加するものである（橋本1948, P.15）」とし、これらを接辞としている。この両者の異なりについて橋本は「語に附いて之に附屬的の意味を加へる獨立しない単位の中、多くの語に自由に規則的に附くものを語（第二種）とし、或限られた、慣用のある語のみに附くものを接辞として、兩者を區別する（橋本1948, p.20）」とし、附屬的な要素から第二種の語だけを語として認めている。

² カ°行鼻濁音を持つ人の格助詞がカ°はガから変容してカ°になったのではなく、常にカ°である。

³ ラテン語の例を表1で示すと、-e という格語尾形態素は第2変化名詞においては呼格で

あることを示しながら、第3変化名詞においては奪格であることを示すといった現象である。言い換えるとある格語尾形態素はどの名詞類においても必ずその格を示すのに用いられるわけではなく、別の格を示すのにも用いられることがあるということである。

⁴ 「融合」と話しことばでの「縮約:(テシマウがチャウに、テイルがテルになるような現象)」とも区別しておいた方がよい。

⁵ 本稿では扱わないが動詞や形容詞には補助的なものが存在する。これらは文法上の形態をつくるのに関与する動詞や形容詞であり、それぞれ補助動詞、補助形容詞と呼ぶ。「書イテイル、書イテシマウ、書イテミル、書キハスル」等下線の動詞は補助動詞の例である。赤クハナイ、静カデナイ、本デナイのナイは補助形容詞である。

⁶ ナ形容詞は学校文法で「形容動詞」の名で呼ばれる。「連体詞」「感動詞」は語彙数が少ないので、日本語教育の初期段階では導入されないが、教育に当って無視できるものではない。

⁷ 副詞や形容詞とされる「マズマズ」「ナカナカ」は、それぞれ「マズマズ」「ナカナカ」といった副詞形、「マズマズダ」「ナカナカダ」といった述語形をもち、同様に副詞形と述語形を持つ「静カナ」などのナ形容詞と同じである。異なるのは連体形が「マズマズノ結果」「ナカナカノ味」のようにノをとる点である。こういった「マズマズ」「ナカナカ」を「ノ形容詞」として形容詞の一類として立てることも考えられる。

⁸ 後述する「夕方ガ好キダ」の夕方を名詞、「夕方出発シタ」の夕方を副詞として2語と考えるのと同様に、「静カナ」を形容詞、「静カニ」といった形容詞の副詞形を副詞とする考え方もあろう。こういったことは「静カ」といった状詞(状名詞・形容詞語幹)や「マサカの結果」の「マサカ」のような連体形を持つ副詞をどのように位置づけるかといった問題にもつながる。本稿では、この問題には詳しく立ち入らない。こういった状詞をどのように位置づけるかについては城田(1982)(1998)を参照されたい。

⁹ 形容詞等に用いられる屈折要素については別稿で述べる予定である。

¹⁰ 語尾助辞によって形成される「連用形」(汎用形)は、「タバニ帰ル」、「泣キニ泣クニ」のようにダ、ノ等の後接を受けることがある。これらは屈折的な語尾変化ではなく、膠着的な接合である。

¹¹ 同じ働きを持つものにデアル(「コレハ本デアル)、デス(「コレハ本デス」)等がある。これらについても別稿で述べる予定である。

¹² この述語化詞は「判定詞」「繁辞」「連辞」「コピュラ」「むすびのくつつき」などと呼ばれることもある。鈴木(1972)のように補助的な単語として位置づけるものもあれば、仁田(2000)のように終助詞などをともなって文を形成することができることから名詞や動詞などと同等の単語として認めるものもある。いずれにしても着目している点は本稿と同じである。

¹³ 「述末詞」は述語に強く結びついており、「*雨が降るもダロウ」のように両者の間にと

りたて助詞を入れ込むわけにはいかない。終助詞は文の末尾に立つがゆえに、「述末詞」の後に「雨が降るダロウよ」のように後接する。

¹⁴ ナケレナバナラナイのような結びつきは動詞が否定語幹形の「假定形」(ナケレバ)にたち、それにナルという動詞の否定語幹形の「非過去形」(ナイ形)が結びついているものであるが、全体が述語動詞のように働いている。このようなつらなりを文法上の語的つらなりと呼んでおくことにする。